自分に何ができるか

2～3面 沖縄戦の継承を捉え直す
寄稿・石川勇人（大阪大学大学院生）
4面 VOICE OF OKINAWA
5面 基地のそばで暮らすということ
6面 沖縄フィールドトリップを終えて

The Young Women's Christian Association
YWCA
〈第34総会期主題聖句〉
平和を実現する人々は幸いである
―マタイによる福音書5章9節―
〈ビジョン〉
女性がリーダーシップを発揮し、
人権・平和・環境を大切にする社会
〈ミッション〉
若い女性をエンパワーし、共に社会変革を進めます。
〈バリュー〉
キリスト教基盤　平和・環境　人権　セーフスペース
6
JUNE 2025
No.786
Since 1905
120th Anniversary

戦後80年の慰霊の月に 沖縄の声を

沖縄では「蝶には死者の魂が宿る」という。
人の魂の上を、米軍機が飛び続けている。

イラスト・文／國分美生（沖縄YWCA会員）

若い世代と沖縄戦

声を手繰り寄せる 継承を捉え直す

大阪大学大学院人文学研究科
石川勇人

「これ以上は話したくないさ」

1945年の敗戦から80年が経った今日、家庭に戦争体験者がいるというケースはそう多くはないであろう。私が幼少だった20年程前は、日常生活の場に戦争体験者がいることは当たり前だった。沖縄で生まれ育った私にとって戦争といえば、沖縄戦である。1945年3月末から6月末にかけて市民を巻き込んで行われた凄惨な地上戦のことである。近所同士の会話に沖縄戦の話が繰り返されたり、戦争体験者が学校を訪問して話をしたりしていた。

中学生の時、祖父母に沖縄戦体験を聞く、という宿題が出された。

「おばあちゃんは、どんな戦争体験をしたの?」

「おばーは、宮古島で沖縄戦を体験した。ひもじい思いもして大変だった。これ以上は話したくないさ」

私は宿題ができなかった。後日の授業で、友だちが祖父母から聞いた戦争体験を紹介するのを聞きながら「なぜ、自分の家では沖縄戦が話せないんだろう」とささやかな疑問を抱いていた。

高校3年生になり、沖縄にルーツを持つ日系移民の子孫たちとの国際交流プログラムに参加した。その中で祖父母の戦争体験を語り合うセッションがあった。日系移民の子孫たちは次々に、祖父母から聞いた家族史(ユンタク)を自分の言葉で語り始めた。かれらの声を通じて、なぜ移民したのか、なぜ自分のルーツが沖縄にあるのかという疑問をひも解いていくと、「沖縄戦」という大きな歴史につながっていった。それと同時に、戦争という出来事を知り、学び直すタネは足元に転がっているという感覚も抱いた。こうした出会いは、私自身が忘れかけていた家族のことを彷彿とさせた。祖母が語りたくない沖縄戦とは一体なんだったんだろう? 絶対に知りたい——私の沖縄戦を学び直す「旅」が始まった。

「五感を通じて学びなさい」体験者の声・戦跡と出合う

沖縄戦・沖縄戦後史を学べるゼミに入りたいという一心から、全国で唯一、沖縄戦の専門ゼミナールがあった沖縄国際大学に進学した。

「とにかく、現地に足を運んで、五感を通じて学びなさい」

ゼミの指導教員の口癖だった。その言葉に触発された私は、沖縄戦の証言記録や沖縄各地の戦争資料館(博物館)や戦跡などを訪れ、土の感触、壕(ガマ)の中の湿度感、臭いなどを確かめながら、沖縄戦中に何があったのかを想像していった。現在のように戦争体験者、戦争体験を取材してきた人々に話を聞く直接的な動機になったのは、大学2年生で受講したオーラル・ヒストリーの講義だった。オーラル・ヒストリーとは、他者の話を聞き、人々の声を通じて現在・過去の歴史を分析する方法だ。講義の中で、自分で調査対象者を設定し、インタビューをする課題が出された。せっかくなら沖縄戦体験者に話を聞いてみたいという好奇心から、地域に住む顔見知りの体験者に聞き取り調査を行った。

「今でも油味噌(沖縄の郷土料理)が

食べられない、あの臭いを嗅ぐとね、沖縄戦中に亡くなった甥の死を思い出すわけよ」

「6月になるとご飯も食べられなくなる、戦争ばっかり思い出すさ」

1対1で真剣に向き合いながら、小さな声をかき集めていった。こうした語りから分かるのは、体験者にとっての沖縄戦体験とは、戦禍を体験した時のことだけに限定されないということである。戦争の傷を抱えて生きていること、家族を失った傷を背負って戦後を生き続けてきたことなど、それぞれの生きざまを包括したのが「戦争体験」であるということを教示している。

継承の枠組みからこぼれた声を聴く

大学3年生になると、体験者への聞き取り調査を行う傍ら、沖縄戦の継承活動の現場や平和学習の講演会にも足を運ぶようになった。そのうちに、大きく二つの声の不在に気が付いた。

一つは、体験者がなぜ語るようになったのか、戦争体験とどのように向き合ってきたのか、という声が聞き取られていないことだ。その背景には、「体験者なら語れて当然」といった継承する側の先入観や、継承すべきは戦争中の体験という社会の前提が存在するのではないだろうか。だが、圧倒的な暴力から生き延びた体験者にとって語ることは容易ではない。沖縄に限らず、多くの人が自らの体験を語らずして亡くなったことは想像に難くない。戦争体験者一人ひとりが長い時間をかけて自らの体験に向き合ったり、時には他の体験者たちと交流をしたりしながら体験を伝えるための準備を行ってきたという前史があることを忘れてはいけないだろう。

そもそも語れるようになった体験者たちは、何が転機だったのだろうか。そこでキーとなるのが、もう一つの声。継承者の声や戦争体験者の声を記録する「聞き手」の声である。日本では、戦争体験を聞き・記録する活動は1970年代から活発化した。その活動には研究者、新聞記者、学校教員、ソーシャルワーカー、あるいは学生といった多様な人々が参加した。聞き手の声には、戦争体験をどのように伝えるか、どのように体験者の声を引き出すか、そも非体験者としてどのように戦争体験に迫ることができるのかといった葛藤が含まれている。ゼロから戦争体験を学び、伝える術を獲得していった聞き手たちの声から私たちが学べることは多い。それにもかかわらず、戦後80年を迎える今日においても、そうした人々の声に光はほとんど当たらない。つまり、継承の枠組みからあふれた声が、無数に存在するのである。そうした声に気付くためにも、継承がどのように行われてきたのか、誰の、どのような体験に力点が置かれてきたのかを「振り返る」ことが求められるのではないか。

profile

いしかわ・ゆうと

1998年、那覇市生まれ。沖縄国際大学大学院修士課程修了。大学時代から沖縄戦の継承団体に所属。沖縄戦体験者へ聞き取り調査のほか、体験者の声の「記録者」への聞き取り調査を続けている。現在、大阪大学大学院人文学研究科在籍。研究テーマは、沖縄戦の記憶の形成と継承。専門は記憶研究、トラウマ研究、ライフヒストリー研究。

CSW69パラレルイベントより

私たちが伝えたい「沖縄の声」

毎年1000以上のNGOが参加するCSW（国連女性の地位委員会）。会期中は、NGOによるパラレルイベントが催される。この3月に、日本YWCAからCSW69に派遣された5名のユースメンバーは、「脅威のもとで暮らす～在日米軍基地問題を共に考える」をテーマにイベントを実施。沖縄の基地周辺で暮らす人々の困難に焦点をあて、自分事として考えてほしいと力強く訴えた。ニューヨークから世界へ「沖縄の声」を伝えた2名のメンバーに、その声と想いを共有してもらった。

祖父母が語った平和への願いを胸に

沖縄YWCA会員　徳田彩

沖縄には、美しい海、温かい人々、そして独自の文化など、たくさんの魅力があります。しかし同時に、沖縄には多くの米軍基地が存在するという現実もあります。日本にある米軍基地の約70％が沖縄に集中しているのです。私はそんな米軍基地のすぐ近くにある街で生まれ育ちました。

80年前、アジア太平洋戦争では沖縄で激しい地上戦が行われ、多くの市民が命を落としました。私の祖父母の世代は、「戦争は絶対にしてはいけない。平和な世界を築いてほしい」と繰り返し語ってきました。私もその言葉を胸に育ちました。しかし現実に目を向ければ、戦争のための軍隊がすぐそばに存在し、フェンスで囲まれた基地が日常に溶け込んでいます。学校では「平和」を学んできたのに、実際には戦争と隣り合わせのような環境に違和感を覚えてきました。米軍機の騒音は一日中鳴り響き、会話すら聞き取れないほどの爆音が私たちの生活を脅かしています。米軍機の墜落事故も繰り返され、多くの人が被害を受けてきました。さらに深刻なのは、米兵による性犯罪です。1945年以降、報告されているレイプ事件は1000件を超えるとも言われており、最も幼い被害者は生後9ヶ月の赤ちゃんでした。

私が育った沖縄では、平和や安全は当たり前のことではありません。沖縄県民は80年間、声を上げ続けてきましたが、いまだにこの現状は大きく変わっていません。私は、「基地があるのが当たり前」になってはいけないと強く思います。そして、私たち若者が、自分たちの未来のために声を上げ続ける必要があります。

祖父母が語ってくれた「平和への願い」を胸に、私はこれからも沖縄の声を発信し続けたいと思います。

恐れず、諦めず声をあげ、行動しよう

沖縄YWCA会員　松田明（めい）

沖縄の大地は、二度と戦争を起こしてはならないと語りかけてきます。それなのに、戦後80年経っても人間を殺す訓練が行われています。沖縄の人間は、自らの意思でこの大地を人殺しの訓練をする場所に提供したことはありません。奪われた土地に多くの軍事基地が建てられ、人や自然、平和が壊されていく様を見せられ、少女や女性は人に言えない傷を負わされ、美しい空に戦闘機が飛び交い、命の海は命を奪うために埋められています。その痛みの声は、平和を求める声は、権力や無知無関心によって無視されています。それでも沖縄は声を上げ続けています。おじーおばーも、私たち若者世代も。何度無視されても平和を諦めないこの沖縄の声を一人でも多くの人に知ってほしいのです。

知ることはすべての始まりです。知ることで、取り組むべき課題やなすべき行動を考えることができます。現実を変えるのは行動です。戦争の足音が少しずつ大きくなっている今、どうか平和のために行動してください。大きなことでなくても、例えば家族や友人と戦争について話し合ってみる。資料館や戦跡に行ってみる。そして何よりも「自分たちの命を守るためには武力が必要」という社会の声に疑問を持って、声を上げることを恐れないでほしい。あなたの行動が、一人ひとりの行動が未来を変え、平和の歴史を作るための一番のキーです。私たち人間は時に愚かで残酷です。しかし同時に愛と優しさ、そして相違を理解しようとする心、現状を良くするために考える知性を持ち合わせています。もう戦争の歴史を作るのはやめましょう。戦争を始め、行うのは人間です。そして戦争をしないと決めることができるのも、私たち人間なのです。

地域YWCAの講演会に参加して

基地のそばで暮らすこと 今いる場所でできること

沖縄本島の中南部、宜野湾市の真ん中に米海兵隊の普天間飛行場がある。2・8キロもの滑走路を囲むように基地が大きく広がり、その周りのドーナツ型のエリアに市民が暮らす。講師の明有（あきら）希子さんはこの街で生まれ育ち、自らも子どもを育て、現在「基地のそばで暮らすということ」の語り部として活動している。

子育て環境の圧倒的な違い

「今日の話は皆さんには耳障りな、沖縄でいう『チムワサワサ（心が落ち着かない）』な感じになると思うのですが、分断をもたらしたいのではなく、沖縄と本土との立ち位置の違いについて考えながら話を聞いていただけたら」と、明さんは言葉を選びながら話をはじめた。

明さんが基地問題に直面したのは２０１７年、娘さんの通う普天間バプテスト教会付属緑ヶ丘保育園の屋根に、米軍機の部品が落下した事故だ。米軍の説明は詭弁ばかりで、無責任なものだった。それまでも基地の存在は不快で不便だと感じていた明さんだが、わが子の命が脅かされたことで、地に足つけて暮らしているこの場所が、いかに危険で異常な状態であるか気付いたという。保育園の保護者たちと共に、子どもの命を守るよう政府へ要請行動をした。皆仕事をしながら子育てする普通の市民だ。それなのに保育園には、「父母の自作自演だろう」など、数々の誹謗中傷が寄せられたという。それを聴きながら私は慄然とする思いだった。こんな不安と恐れの中で子育てすることは本土ではまずない。

落下事故の６日後、普天間第二小学校の庭に米軍ヘリの窓枠が落ちた。その後しばらく防衛省職員が学校に待機して、米軍機の飛来が分かると子どもたちは校舎内に逃げるという措置が取られた。体育の授業が正味10分ということもあった。子どもたちが教育を受ける権利も奪われているのだ。

普天間飛行場の２・８キロという滑走路の大きさも想像したい。自宅から２・８キロの地点を地図で見てほしい。それが街のど真ん中にあるのだ。他にも、身体を震え上がらせる騒音、軍機・ヘリの落下事故、屈強な米兵による暴力被害などの不安やストレスと常に隣り合わせ。平和な日常を生きる権利が奪われ続けている現実が、静かにひしひしと伝わってきた。

沖縄の犠牲の上に自分は立っている

そもそも沖縄には、在日米軍基地の70％以上が押しつけられている。それは、生徒47人のクラスで、沖縄という1人の生徒に、33個のランドセルを背負わせている状況だ。学校なら、酷い「いじめ」だろう。だが日本社会でそんな認識が共有されているだろうか。

明さんは言う。沖縄では、運動はいつも、自分たちの暮らしや命がかかっている抵抗運動だ。だが本土で講演をしていると、「沖縄の人はこうした方がいい」と見当違いの助言をしてきたり、辺野古に何度も行ったと誇らしそうに話してきたりする人がいる。ときに本土の人は、沖縄に関わる活動を自己満足か何かのようにやっていないだろうか。この問いかけに、私はまさに「チムワサワサ」となった。

これは「沖縄の問題」なのではない。沖縄に、戦争中も占領下も復帰後も大きな犠牲を強いながら、本土の人間が「平和」を享受してきたということなのだ。明さんは、その圧倒的な不均衡や差別、「踏みつけている足」に自覚的であってほしい、その上で、何ができるか考えてほしい、と問いかけたのだと思う。それは私の中で重く響いている。この「足」をどかすために何ができるのか。私は私のいる場所で考えながらできることに取り組んでいきたい。

編集部会　西文子

東京YWCA平和と正義委員会
チーム「月桃の会」主催
「基地のそばで暮らすということ」～今、本土のわたしたちに問われていること～
2025年3月15日（土）東京YWCA会館

［沖縄フィールドトリップを終えて］

出会いがもたらした平和のタネ

大阪・沖縄YWCAのローカルアクション「沖縄と大阪を結んで女性の人権とジェンダーの課題を考える」。2年にわたるプログラムの最後に、沖縄フィールドトリップを実施した。この旅で出会った人々の言葉や想い、経験から、課題と希望が見えた。

昔話だった沖縄戦が今ここにある

旅の目的の一つは、若い世代への沖縄戦の継承だ。3名の大学生が2年間かけて学び、平和ガイドとして私たちを案内した。その一人、大城陽（あきら）さんは、沖縄本島南部の糸満市に住んでいる。沖縄戦終焉の地として平和祈念公園があるが、これまで訪れることなく、家族で戦争の話をしたこともなかった。そんな彼女にとって、プロから学ぶ戦跡学習は当初、受験の暗記科目のようだった。しかし、何度も現地に足を運んだことで、遠い昔話だった沖縄戦が、今ここに当たり前のようにある米軍基地につながっていることを知ったという。さらに「糸満の土を辺野古の埋め立てに使わせない」運動を知り、「遺骨が混ざった土を基地建設に使うなんて許せない」と実感したそうだ。

新基地建設が進む辺野古・大浦湾で

辺野古新基地建設は現在、大浦湾の軟弱地盤改良工事に入っている。私たちは基地建設に反対する抗議船「不屈」に同乗した。大浦湾に入るとすぐに海上保安庁の巡視船が猛スピードで迫ってきた。マイクで「土砂運搬船が通るので気を付けて」と言うが、注意ではなく威嚇されているようだった。

「辺野古は普天間の代替基地ではなく新基地だ」と断言するのは、不屈の船長、金井創さんだ。海底が深い大浦湾は太平洋から軍艦を横付けでき、キャンプシュワブから海兵隊員を、辺野古から兵器を積み込み、すぐに戦場に出動できる。狙いは自衛隊と米軍が共同使用する「一大新基地建設」であるという。「たとえ10分でも抗議行動で工事が止まれば、同じ志を持つ全国の人がここに目を向け、声を上げ、それが政府を動かしていく」と信念を持って語った。

金井創さん

山城莉乃さん

大城陽さん

沖縄の戦後を語る旧コザの街で

本土復帰直後の1974年に合併して沖縄市になった旧コザ市を、山城莉乃（りんだ）さんの案内で歩いた。インドにルーツを持つ彼女の父はコザで米兵相手のテーラーを営んでいた。嘉手納基地のおひざ元コザの街の盛衰は米軍と切り離せない。かつては県内一の繁華街で、赤線地帯があった。山城さんはたくましく大らかな祖母と母を見て育ったけれど、街には男に媚び、性を売る女性がたくさんいて、女性としてのアイデンティティを築くのにとても混乱した。50歳近くになってやっとまともに向き合うことができたと率直に話していた。

多様なつながりが希望をもたらす

最後に参加者の一人、大阪で子どもの居場所事業に携わる西川日奈子さんの感想を紹介したい。

「家庭内での暴力も世界規模での暴力も、根っこでつながり連鎖しています。知りたくない関わりたくないという無関心と無気力に『平和につながる方向はこっちやで』と子どもたちに笑顔で呼びかけ続けたい。平和への思いは、多様なつながりを得ることで希望への力となる。その思いを強くしました」

大阪YWCA会員　辻川さとみ

「ひろしまを考える旅 2025」開催報告

核のない世界のために「想い」を伝えていく

全国の高校生からシニア、また韓国・中国YWCAからのゲストも参加し、総勢32名が春の広島に集いました。Genuin*共同創設者の徳田悠希さんによる基調講演に始まり、資料館見学や碑めぐり、フィールドワークでは被爆証言や空襲の体験を聴き、「核兵器の非人道性」というテーマを探求。最終日は、旅を振り返り言葉にするワークショップを経て、「想いを伝える」時間では、静かに自分と向き合い、それぞれの想いをつづりました。参加者の「想い」を紹介します。

●2025年3月24日～26日開催

＊ジェンダー平等の視点から核兵器廃絶を求めて行動するユース団体

平和への歩みは対話から

3日間さまざまな年齢の方と、それぞれの視点や立場から広島について考えることができました。ヒロシマは過去に起こった悲惨なこととして捉えていましたが、今もなお続いている問題であり、当時を思い出して怖い思いをしている方々がいることに気付きました。3日間のことを自分の中で留めているだけではそこで終わってしまいます。核を持つことは平和のために必要だと考える方もいるかと思いますが、その方を一方的に嫌悪するだけではいけないと思います。それだとますます対立が深まり、平和な道は遠のくばかりです。人と人とが関わるために必要なのは対話です。理解できないことは仕方のないことだとも思います。でもお互いの意見をしっかり聞き、どうすれば良くなるのか、できるだけお互いが歩みよるために話すだけでも変化は生まれると思います。まずは身近な話しやすい方へ、旅のことを話していきたいと思います。

左近莉子 高校２年生

未来を平和にする責任

改めて私たち若い世代の責任について考えた。韓国人被爆者である李鐘根（イ・ジョングン）さんの伝承をしている甲斐晶子さんのお話の中で聴いた「過去の戦争の責任は（今の若い人たちには）ないけれど、未来を平和にする責任はある」という言葉。晩年まで証言活動をされていたこと、多くの被爆者の方が、トラウマや悲しみを持ちながらも発信してくださっていることの重みを感じた。同時に、未だ核兵器がこの世界からなくなっておらず、日本政府にも期待ができず、さらには若い世代が無関心であることを通して、高齢になっても証言活動をさせていることを改めて自覚した。米軍による原爆投下、アジア・太平洋戦争を含む過去の出来事は、今この瞬間と地続きであり、その中で懸命に生きてきた人、声を発せずに亡くなった人など、多くの人の生活があったことをないがしろにしてはいけないと感じた。核兵器に関わる問題の複雑さを安易に簡単にして何かを切り捨てることなく、複雑なまま考え、学び、伝えていこうと思う。

名古屋YWCA会員　松永優佳

「自分のことば」を見つけたい

話される方は皆さん、「『自分のことば』で伝えられるように！」とおっしゃいます。さて？ 私にはそれがあるのだろうか？ といつも思います。広島への想いはあって、だからこそ今回の旅に参加したのですが、借り物のことばを使っていないだろうか、と思うと人前で話せなくなります。原爆資料館・碑めぐりで見聴きした“生”の言葉は、そんな今までの甘い感傷を許しません。旅に出合った責任は、自分ひとりの経験で終わらせることを許しません。呉のフィールドワークでは、過去から進行形の現実を見せつけられました。呉YWCAに歓迎され、語り手、中峠（なかたお）房江さんによる紙芝居『ふうちゃんのそら』を間近で鑑賞しました。ご自身が経験した呉空襲の記憶です。生活と地続きの「戦争」がやわらかに染みてきました。帰り際の、中峠さんの小さな手の温かさを思います。これからも、体験すること、そして話を聴くことで「自分のことば」を見つけていきたいです。

東京YWCA会員　増田悦子

エンパワーするNGO YWCA

2024年度　寄付報告（2024年4月1日～2025年3月31日）

活動へのご賛同ありがとうございます

- 日本YWCA賛助費 …… 1,443,000円
- ピースメーカーズ募金 …… 4,155,092円
- 日本YWCAユースエンパワメント基金 …… 565,224円
- 東日本大震災被災者支援募金 …… 886,545円
  （うち、カーロふくしまサポーター …… 80,000円）
- 災害時支援募金 …… 3,118,933円
  （パレスチナYWCA支援、ウクライナ支援、ビルマ／ミャンマー支援、能登半島地震被害者支援含む）
- オリーブの木キャンペーン募金 …… 747,000円

【　2025年度もよろしくお願いいたします　】

※当法人へのご寄付は、税額控除の対象となります。※メールまたは振替用紙通信欄で次の情報をお知らせください。領収書を発行します。
①振込日　②金額　③名前　④住所　⑤寄付項目　⑥名前のアルファベット（オリーブの木キャンペーンへのご寄付のみ）
※ご希望の寄付項目を必ずご指定ください。※年間3,000円以上のご寄付で、機関紙を送付いたします。

振込先　三井住友銀行　飯田橋支店　普通預金　1198743　（口座名義）公益財団法人　日本 YWCA
ゆうちょ銀行　〇一九支店　当座預金　23723　（口座名義）公益財団法人　日本 YWCA

郵便振替　（記号番号）**00170-7-23723**　（加入者名）公益財団法人日本 YWCA

『沖縄・辺野古の抗議船「不屈」からの便り2』

金井創　著
みなも書房（2025年）

人は圧倒的な力の差を感じた時、
無力感にさいなまれる。無力感は絶望へと向かう。
個人の善意や志では抗いきれない権力と対峙しながら、金井創さん（6面参照）が持ち続ける陽の明るさは、どこから生まれるのかと私は考える。揺るぎない信仰と他者への信頼からか？　本書が示すのは、辺野古の新基地建設と抗議運動の真実だけではない。平和は争いからは生まれないと非暴力をつらぬく姿にガンジーが、自然への畏敬の念と共生を目指す姿に山尾三省が、人々と連帯しながら何度も立ち上がる姿に瀬長亀次郎が、金井さんの語りを通して私には見えてくる。

大阪YWCA会員　辻川さとみ

ご協力ありがとうございます

賛助費
渡部静子　大野綾子　鶴崎祥子　牧甫

ピースメーカーズ募金（平和を創り出す女性のリーダーシップ養成）
オザワジュンキチ　オノトモコ　コザワヨシノリ　鶴崎祥子　新倉春美　日本基督教団弓町本郷教会　一般財団法人広島YWCA

災害時支援募金（国内外の災害被災者支援）
嘉屋陽子　学校法人東洋英和女学院　宗教教育委員会　釧路YWCA　一般財団法人広島YWCA　公益財団法人福岡YWCA

（オリーブの木キャンペーン募金）
小笠原純恵　張善花　鶴崎祥子　遊佐藍子　日本基督教団浪花教会（澤山会）　日本基督教団広島南部教会　日本基督教団代々木上原教会　一般財団法人函館YWCA　一般財団法人広島YWCA

（ウクライナ支援）
鶴崎祥子　一般財団法人函館YWCA　公益財団法人福岡YWCA

（パレスチナYWCA支援）
嘉屋陽子　鶴崎祥子　牧甫　日本聖公会仙台聖フランシス教会　フィッシャー幼稚園　名古屋YWCA　ブッククラブf

（ビルマ／ミャンマー支援募金）
鶴崎祥子

東日本大震災被災者支援募金
鶴崎祥子　日本基督教団佐世保教会　学校法人東洋英和女学院　宗教教育委員会　弘前YWCA　一般財団法人広島YWCA

日本YWCAユース・エンパワメント基金
水田暖江　関東学院六浦中学校・高等学校　東洋英和女学院中高部 宗教委員会

（2025年2月16日～4月15日　敬称略）

発行所 公益財団法人日本YWCA　〒101-0062 千代田区神田駿河台1-8-11　東京YWCA会館302号室
Tel. 03・3292・6121　Fax.03・3292・6122　office-japan@ywca.or.jp　www.ywca.or.jp
編集発行人 実生律子／偶数月1日発行
旬な情報発信しています　メルマガ登録　y-net@ywca.or.jp　にお名前を送ってください ／ フェイスブック　www.facebook.com/YWCAJapan

メールにてご意見・ご感想をお寄せください。今後の紙面づくりの参考にさせていただきます。 office-japan@ywca.or.jp

無断での複写・転用・転載はご遠慮ください。